菩薩変じて夜叉となりし哉

1

以下は、ニワが語った回想である。

山岸先生は、後になってから私に、「よう気が違わんでくれた。よう死なずに生命のあったことよ。私ならとっくの昔に気が狂っているか、死んでいたろうよ」「ぼくらが過ごした三年間の夫婦生活は普通の六十年間添いとげた夫婦の何倍にも相当するやろ」といわれましたけどね、私達の関係などというものは、到底よそさまの想像のつくものではないのですよ。結婚当初の私は百万羽があるところへもってきて、山岸先生の毎日の気が狂ったような行状で、もう何が何やらわかりませんでした。本当に今思うと、山岸先生のいわれる通り、よく生き残ってきたものと思います。

そういう山岸先生ですから、求愛、求婚の仕方そのものが変わっていましてね。そんなところから話しましょうか……。今考えてもようわからん面白い話が色々あるんです。

四日市では、私は飯炊きの婆やと娘の美和子と、他人（ひと）の離れを借りて三人暮しでしたけど、特講が終わって帰ってからは、家の中は打って変ってしまいました。

そうなんです。もともと人の来る家でしたけど、今度は山岸会の会員の人がよく来るようになった。

始終誰か来て、ただめし食って帰ってゆく。多い時には一ぺんに三人も四人も来る。そのために食事の準備で婆やはてんてこ舞いでした。中でも一番しげしげと頻繁にやって来たのが山岸先生で、朝仕事の行きがけだといっては寄り、帰りだといっては夕方に寄る。いやが応でも、先生を意識せざるを得ませんでしたね。そしていい加減いやになった頃に、今度は先生の求愛が始まりました。

その求愛の仕方たるや山岸流ですこぶる変わっていましてね、真夜中に家に忍び込んで愛を告白しに来るんです。

ある晩、私が何とのう自分の寝ている枕元に人の気配を感じて、ふと目を覚ますと、そこに先生の顔があるじゃないですか。あっと思って目が合うや、先生はニコッと笑みを浮かべて、「ああ、目が覚めましたか、お早よう」とそれだけいって、亡夫の福里の写真の前に丁寧におじぎして、すっと帰っていかれたんです。

一体どこからどうやって入ってきたのか、見当もつかんことでした。家はむろん晩になれば、ちゃんと戸閉りをして寝るし、どこからも入るすきはない。そうでなくても女三人所帯ですから、ちょっとした物音にも敏感に気づくはずです。それが一向に物音をさせずに、三人とも知らずに寝込んでいる室に入ってくる。まるで甲賀の忍者みたいに……。

そういうことが一週間も続きました。同じようにふっと人の気配を感じて、目を覚ますと先生が居り、先生はまた「ああ、目が覚めましたね」といって、福里の写真に黙礼しては帰ってゆく……。ただ最初の夜と異なるのは、恋文が置いてあることだけです。恋文といっても、ザラ紙に鉛筆で短く認めてある程度のもので、「なるもよし、ならざるもよし、ならざれば、永久(とわ)に春みぬわれ知る真恋」などといった歌が書きつけてありました。

「私は本当の真の妻に巡り会えた。求め求めてきた真の妻に巡り会えた」というのもあった。また「私は鍛冶や、あなたは名刀」とか、「あなたは名刀、私は使い手、名刀と名剣士が相まって一つのものになる。どのような名刀も名剣士の使い手なくしては鈍刀に等しい」なんていう意味の文句を書いた紙切れを、畳とふとんの間に差し入れてゆくんです。

こうなってくると、私も少々ノイローゼ気味になりました。婆やは婆やで、家計がかさんで、始終銀行に金をおろしにゆくものだから、銀行から不審がられる。それで「山岸会のお蔭で私は盗っ人にされた」「天理教はやしきを払うといっても一抱えであるが、山岸会は身も心も全部持ち込むんだから、これほど恐ろしいところはない」といってこぼしてました。

そうこうするうちに、先生の気持ちはさらにエスカレートして、結婚を申し込んできた。この求婚も風変りなもので、先生は最初、私にこういうふうにいうんです。

「福里さん、あなたと私との間には、大変に素晴しい子供が生まれると思いますが、どうでしょうか……」

私はすぐには先生の真意が摑みかねて、

「そりゃそうですね。先生と私との間にもし子供ができれば素晴しい子供ができるでしょうね」

と儀礼的に答えました。すると先生は単刀直入に「それでは私の子供を産んでくれ」というのです。私は驚きました。すぐさま「それはちょっとお門違いじゃありませんか」と断わると、「いや、私があなたにこういうと嫌われるのは重々知っているんだ。けれども決して私心からいっているんではない。私は全人のために、本気であんたとの子供を残したいと思っているんだ」

というんです。私はこの強引な申し出に、それでも相手の気を損じないようにいんぎんに断わる

と、さらに先生はいいました。

「いや、重々わかっている。どうしてもあなたが肉体交渉でもって産みたくなければ、あなたの卵子を貰って精子と結合させてつくる。そういうことを考えてもいいんじゃないかと思う。できないことはないと思う。どうしても私との肉体交渉が不潔だと思われるなら、あなたの卵子が欲しい」

この突拍子もない申し出に、ようやく私は「そういうことなら考えさせていただきましょう」と相手には色よく感じられる返事を与えたものの、内心はすっかり嫌悪感にかられてしまいました。十数年間、男嫌いで通ってきた私であってみれば、男女の結合、しかも先生との間で考えることはとてもできないことだったんです。それからというものは、先生の顔をみるのもいやになって、そこいらにうろうろしないでくれとも、宣告していたんです。

その私が翌年三月になって何故急に、求婚を受けるに至ったかというと、それにも面白いエピソードがあって、百万羽の計画が決まって育雛舎一棟、幾坪の間に何羽入れるか、という計算をやってたんです。それが仲々計算できない。先生は全体を三百三十三で割ってくれというんですが、それが算盤の達者なものたちと一緒にいくらはじいてみても、どうしても端数が出てきて割り切れない。それがある朝、泊り込みで私の家の一室で計算していた先生が、襦袢とステテコ姿のまま飛び出してきて、私の枕元で、

「割り切れた、割り切れた、三百三十三で割り切れたよ」

と、飛び跳ねるんです。聞くと、いくら算盤でやってみてもダメなものが、手を頭に当てがって暗算していたら割り切れたというんです。その時の感激たるや大変なもので、子供のように小躍りして嬉しがってました。その感激に私も同調しちゃって、男の前では寝巻姿を見せたこともないのに寝巻

のまま飛び起きて、一緒に抱きあって、「割り切れた、割り切れた！」と、はやしたてている中に先生に唇を重ねられてしまいました。

私には夫以外の男との初めてのくちづけで、こうなってしまえばいや応もないので、私は明くる朝、「お申し込みお受けします」と先生に結婚承諾の返事をしました。

ところが先生と婚約して一月たつかたたないうちに、忽ち後悔せざるを得ない羽目となりましてね……。五月に入って卵粉工場のことで二人で農林省の畜産局長のところに行って、その帰途初めて進水式を終えたんですが、その喜びの新婚列車が京都へ着くや否や、途端に私は「しまった。えらいことになった」と思ったんです。というのは、東京の報告を持って特講会場の宝寺へ着いた途端、Y子が泣いてあっちへ走り、こっちへ走りしたりしていて、彼女を宥めるのにみんながてんてこ舞いをしているんです。これがそもそもの苦労の始まりでした。

私とすれば、Y子の存在は知らないではなかった。いや、実のところ私は、そういうことになるとと疎い気質で、誰と誰が怪しいなどということには殆ど関心がない。それで山岸にはY子という秘書がついているといっても、疑うことはなかったし、更に二人がY子の実家で暮らしていると聞いてすら、愛人関係であると信じられなかった。それは何かの事情でそうなっているので、まさか自分の娘と同年齢の少女が、そろそろ六十に手が届きそうな男と愛人関係にあろうなぞ、想像することもできなかったのです。

私とすれば前夫人の志づ子さんの問題もありました。先生は離婚して三年になるというのに、まだ志づ子さんの籍をぬいていないのです。しかしそれについては娘の映が結婚するまで待ってくれ、間もなく結婚するからその後に手続きする、ということでケリがついていたんです。同様にY子の問題

についても、事実と知って、私には複数婚の意志がないことをハッキリと山岸に伝えてありました。「もし私に結婚を申し込まれるなら、山岸式結婚観に立っての申し込みでは、大きな誤算が生じますよ。私は今まで通りの結婚観、倫理観の上に立って結婚するのであって、それ以外の何ものでもない」と。

それに対して先生は、「その通りでいいのです」「今迄の通りでいいのです」ということであったし、当のY子も「愛研」で話し合った結果「喜んで後退します」と明言したので、単純にその言葉通りにとっていたんです。

その結果の、三月末の二人の結婚発表だったんですが、ところが今、こうして現実にY子が先生が離れたといって泣き騒いでいるのを知っては、約束が違うという前に、「私としたことが、してやられたな」と思った。それと同時に、まだ幼子の彼女が愛情の問題でそんなにも苦しんでいることがショックであり、初めて男と女の間の問題の複雑さを知りました。

事態はその後も一向に変わりませんでした。Y子は一旦は後退しますといったものの山岸と離れられないで、死を口ばしっては家を飛び出したりするんです。ことに二人揃って、その頃買収した「東海日々新聞」へ出かけたりすると、途端にY子は「私は除けものにされた」と飛び出してしまいます。するとその後をすぐさま、先生にいいつけられた護衛役が飛び出してゆきます。

Y子が電車に乗れば電車に乗り、タクシーで走ればタクシーでまた追いかけ、行き場がわからなくて映画館の館内まで調べて回るといった、まるで逃走劇もどきの毎日を繰り返していました。山岸先生とすれば、「ここでY子を死なせては全人革命も何もない。元も子もなくなる」ということで、必死になってY子を保護していたんです。だけどY子は丁重に保護されればされるほど一層みなに甘え

て、死を口走ったりするわけです。

あまりのことに私は、「そんなにY子が、Y子がといわなくとも、彼女は大丈夫ですよ。本当に死にやしませんから……」というと、途端に先生は顔色を変えて、「お前という奴は何という薄情な奴だ」と罵るんです。

私とすればY子とは親子ほども年が違うし、性格もまるで違うので、先生を張り合う気などさらさらない。ただこうなると、一刻も早く先生の許を去りたいばかりでした。ところがそれができなかったのは、山のことがあるからで、先生にしてもその私の責任観念の強いことを知って、「もし別れるんだったら、ぼく一人でようやってゆけない。全人運動も百万羽もこれでおしまいだ。別れるんだったら責任をとれ」というのが、最後の切札の文句でした。そして、

「別れては一人ではよう生きていけんから、殺して私も死ぬが、死ぬのなら今ここで死のう」

という始末です。私は死ぬのは構わないけど山のことがあるから、「それでは山はどうなるんです」というと、「山もクソもあるか」と日頃の優男振りはどこへやら、まるで無頼漢のように口汚いいい方をするんです。

こんなふうに先生は私と結ばれた途端に、変わり始めました。「君子豹変す」というが、先生の場合、まさにそれで、仏の山岸変じて鬼の山岸となるといった具合でした。しかもその豹変振りはますますエスカレートするばかりで、「この薄情ものめが、この薄情ものめが……」を連発しつつ、人前だろうと何だろうと、暴れ放題に暴れました。いや、二人きりの時はそれほどでもないのに、人前だと一層暴露的になって私を罵り、そこらのものを手当り次第にぶつけてこわしたりするんです。

旅館にみなを集めて話している最中に、私を抱えて二階から飛び降りようとしたこともあります。

これはその前に先生が、「これから飲みに行こうじゃないか、四日市の飲み屋を飲んで歩いて散々暴れ回ろうじゃないか」といったんです。それを、先生は平生は酒を飲まないことはわかっているのだから、黙っていればいいものを、気のきかない人がいて、「山岸先生、そんなことできるわけがないでしょう」といったものだから、先生は、「何、できないといったか!?」といった途端に、目の前にある料理が並んでいる大きなテーブルをぶわっとひっくり返してしまった。

それをいった当人はビックリして、顔が青くなってました。そして次の瞬間、先生は私を抱えて二階から飛び降りようとしたんです。「一層のこと死のうじゃないか」と。

そんなことが毎日つづいてました。しかしそうなってくると私は、持ち前の度胸のよさが一層坐ってきて、冷静そのものになるんです。返って静かになってにこやかな口をきいたりするんですが、そこをまた先生は決して見逃しません。周りの人たちに向って、

「あなたたちにこれがわかるか、こいつの涼しい眼が曲者じゃ、涼しい目が……」

と私の眼を指差して怒るのです。

こうした猛烈な夫婦生活の合間をぬって、二人はまた山の仕事です。二人がやりあっている間にも、ぞくぞくと地方の会員が、新社会を夢みて集まってくる。その人たちの宿舎を用意せねばならない、候補地を決めねばならない、決まれば引っ越しをせねばならない、新しい国づくりに伴うあらゆる面を構想し、手当てをせねばならない……で、これまた一日三十六時間ぐらいの忙しさです。

こうして内外ともにてんやわんやの中にあって、九月、雛入り式が行われたんですけど、雛を手の平の上に乗せられても心から喜べる気持にはなれなかった。まして十月の開山式ともなれば、これで責任を果したと山を離れる気でいましたので、挨拶のことばが辛くて、辛くて……。しかしそうもな

らず、十一月には愛研が開かれて、Y子やその他のメンバーもやってきましたが、結局は一体の話には至りませんでした。

その愛研の一日、山岸は私をかき抱いて人の背丈ほどもある寺の縁から、庭の大石めがけて飛び降りました。そうした挙句の、年を越した正月十七日の熱湯事件だったわけです。

2

その日、いえ、それをいうにはその二日前から話さねばならないのですが、十五日の朝、山岸先生は例によって四日市のY子のところから帰ってきました。

私たちはその頃、春日の麓の中林さんの離れに住んでたんですけど、戸をバタンと蹴破って、靴のまま上がってきて、ええ、靴のまま上がってくることなんぞ常習犯です。怒った顔で、何かやるものはないかという感じで辺りを見回して、バーン、バーンとそこいらを蹴散らかしていました。先生は私が家主さんに声を聞かすまいとして、声をたてないことを知っているんです。だからわざと私を困らすためにそういうことをして当り散らすんです。

そして私と先生についてきた英ちゃんというのに、こういうんです。「こいつは今日六時何分の汽車で四日市に行く。六時になったら縄つけて山に引っ張ってこい。そしたら四日市に連れていって二人一緒に殺してやる。Y子と二人揃えて殺してやる。その方がいい」

私はまさかと思いましたけど、さすがに英ちゃんはガタガタ震えていました。その前に英ちゃんは先生に「こいつをしめろ」といわれて、私の腰紐をこう回して（首にあてがう）、ノドをしめようとし

た。とても芝居とは思えないんです。

それで英ちゃんは先生が出て行くや、「逃げてよ、隠れてよ、こりゃいかん」といいだした。というのは、四日市でY子と別れる時にまずいことがあったらしい。Y子の付き添いの一人が、Y子があんまり聞きわけないんでつい蹴とばしたんです。そんなふうなことがあって、先生の機嫌が悪かったんです。

それで考えた挙句に、山に逃げようということになった。山はその時、鶏がコクシジウムで全滅に陥る恐れがあったから、全員釘づけになっていたんです。大勢の中へ入れば見つかる心配もないし、隠れることもできるだろうということでした。それで私は、寝巻にもなるし、どこにでも寝転がれるような恰好して、ネルの着物着て、半纏着て、ショールで頬かむりして山へ逃げ込みました。山ならかえって灯台下暗しでわからんだろうと、先生たちが寄り合いしている隣の室の押入のふとんの中に潜り込んだのですが、後から案の定、大騒ぎです。

先生は側近のものに、「お前隠したんだろう」と一升瓶を振り上げて怒ってました。それで結局私、自分で出て行ったんですが、山岸先生、怒ったの何の、私はつくったばかりの道で、赤土が凍てついて角が立っている道を、石をぶつけられてゲタもはかず、足袋はだしのまんま降りて行きました。

だけどおかしいんですよ、それだけ物すごい形相で怒っていて、四日市の駅前で、「私おなか空いちゃった、うどん食べてゆきましょうよ」というと、すぐに「うん寒いね、うどん食べてゆこうか」と、こうです。どこをつかんで物をいったらいいのかさっぱりわからん。

そしてY子のアパートへ行ってみると、これまたあんぐり、Y子はさぞかしこわがっているやろ、しばりつけられてでもいるのかと思いきや、きれいにお化粧して、新しいカッポウ衣着て鼻唄うたっ

ているんです。「ただいま」と先生がいうと、「お帰り、ああやっぱり先生帰ってきてくれたのね」というなり先生に抱きついてキスしている。あほらしゅうて、あほらしゅうて……。（笑）

その晩は何十年来の大寒で、手の切れるような寒い晩でした。その寒い晩にアパートの周りを側近の人たちが、ずっと夜通し回って警備してるんですよ。ありがたいと同時に、気の毒でしようがない。話してるとまた愛研の時みたいになって、「Y子が可哀想で」「こいつは鬼みたいな奴や、こいつの頭ぶんなぐったれ」と、Y子をけしかけてる。私はまるで全身に泥かぶってるようなもんです。

そのうちに「立て！」というと、私に「真っ裸になって、四日市の町中を走ってこい！」というんです。四日市という町が私にとってどういう町であるか、千も万も知っていってるんです。私も気が狂ったと思われればなんでもないじゃないかと思って、「ええ、わかりました」というと、「真っ裸だぞ」「ええ、走りましょう」とさっさと、帯を解き始めました。

そして、いよいよ掻巻一枚になってから、「先生、もう一度お尋ねしますが、お腰もとるんですか？　一糸まとわずということですか？　それともお腰はつけてもいいんですか？」と聞くと、「真っ裸だ！」というんです。それで「ああそうですか」と、お腰もとりにかかったら途端に、「待て！」と声がかかった。「そこまで！」と止めるんです。

それでほめてくれるのかと思ったら、「こいつが、こいつが」です。いうようにしてもいかんのやなあ、どういうことなんだろうとわけがわからなんだ。それでも明け方になって、寝ようということになって、炬燵を真ん中に置いて、私が先生の後ろに寝て、Y子が先生の隣に寝ました。そしたら先生、足ではY子を愛撫して、手では私を愛撫しようとなさるんです。ええい、けがらわしいと思って、手を掴んでパッと横に置いたら、うわッと立ち上がって、炬燵の天板を持ってバーンと私に叩き

つけるんです。
「どうしたんですか」と、それでも私はじっと我慢の子でいましたら、先生は、
「ノドをしめて、しめ殺せ！」
というんです。「英公、ようやるか」「はい」といったものの英ちゃんは真っ青になっていた。「今日、お前連れてきたのはそのために連れてきたのだぞ」「はい、結構です」「覚悟はできているな、いいな、やれ！」
私は、腰紐は渡してあるし、「途中で止めると苦しむそうだから、途中で止めないでね」と念を押したら、英ちゃん腰紐持って私の首に二回り回しかけた。
そしたら途端に先生、室外に飛び出して行ったので、みんな腰を抜かしたみたいになってそこにへたり込みました。芝居だとか、ウソだとかとても思えないんです。みんな腰を落ちつけた時には、虚脱状態になっていましたね。
そこで明くる日、Y子と話し合ったんです。話し合うといっても、Y子はラジオを聞いて鼻唄うたいながら、縫物しているんです。そして、「私ね、先生いじめて、いじめてやるの」とか、「私なんか蔭の女なんやからというとね、先生泣きだすの、泣かしてやるの」といじらしいとも、腹立たしいとも何ともいいようのないことをいっているんです。そのY子をなだめすかして、「私とあなたと奥さんを交替しましょう」「そうしていいわ」ということに了解ついて、先生に喜んでもらうつもりで春日に帰ったのが十七日の夜遅くです。
で、家に帰ったら、家にいない筈の山岸先生が靴をはいて、オーバー着たままふとんをかぶって寝ているんです。室には他に何人もの人がいました。

でも何となく不安というか、危険な予感がしました。それでもできるだけ平静を装って、先生にこういうことになりましたと報告したら、こわい顔しましてね、先生の狙いはそういうことじゃないんです。「もういい、もう時期は過ぎた。もう実行あるのみだ。これから岡本善衛の家に行って火をつけてこい。その前に岡本のところへ行って、何千万かとってこい。とってきたら焼き払っていい。岡本を焼き払いに行く前に、中林の家にも火をつけろ」先生はそう大声でどなるのです。
火をつけろというのは、四日市のY子のアパートでもいってました。その時には、私の娘夫婦がいる京都の丹波から先にやれと命じてました。
それで私が、「それはできません。善人の人たちに対してそんなことがどうしてできますか？」というと、「問答無用だ！　それが革命だ。ぼくが生きているうちにやらなければ誰がやるんだ。今日からこれが始まる。日頃案を練っていたのはそれだ。行く前に中林に火をつけてから行け！」こういうんです。
その次には、「丹波へ行って、丹波の奴をみな殺しにしてこい。それで捕まるなよ、丹波に行って……」私が「それじゃ、どうしたらそんなふうにできるんですか」というと、「丹波の奥に火をつけろ、そしたら表に回れ、表に回って飛び出してくる奴を刺せ！」
私はその時分日本刀持っていましたからね、それで出てくる奴を突き刺してしまえというんです。大変な血相でね。もう普通の面相とは違います。それで私はいよいよ気が狂ったなと思いました。
「ぼくは長くは生きてはいない。生きているうちにやるんだ」
「そりゃあなた、うぬぼれじゃないですか。そんな今あなたがいわれているような革命なら暴動であり、流血革命ではないですか？　私たちは愛と理智の革命なればこそ、寄ったものではありません

か」

「問答無用、実行あるのみ！」

「いくら問答無用でも、それをさせるわけにはゆきません。またあなたがやらなければ誰がやる、というのはあなたの思い上がりにすぎません」

私は自分でもビックリするほど、ますます冷静になって先生に説きました。それでも先生は、「問答無用だ、どうしても今すぐやれ！」の一点張りです。それで「どうしてもやらなければならないのなら、Yちゃんの実家の川尻はどうするんです。Yちゃんにもやらせるんですか？」というと「もちろんやらせる」「同じやるなら交替してやりましょうか？」といったものの、これは売り言葉に買い言葉であって、すぐに思い直したようにしていいました。

「やはりやるなら丹波は私にやらせて下さい。私は他の人はようやらんでも、私と美和子の命を断つくらいの術は知っています。どうせやらんならやってきましょう。あの子も私のような母親の子に生れたのが不運というもので、諦めてもらいましょう」

そういって納得させました。

この間問答は、二時間あまりかかっているんです。その間も、先生の気の落ち着くのを待って、お茶をいれて出してみたりするんですが、お茶を出すとバーッと飛ばしてしまいます。その時の先生の面相といわず、口調といわず、もう完全に気狂いのものだと思いましたね。

私が承知すると今度は一人ずつみなに、お前はどこそこやれと命じている。一人できんというのがいたら「できないということはどういうことだ!?」といわれて、忽ち「やります」となりました。「大島、ここをやってこい」「はい」といった調子で、みなやります、やりますという。こりゃいかんな、

と思いました。誰か一人がやれば、群集心理で本当にやってしまう。つっ走ったら収拾がつかなくなってしまいます。

山の人間はみな帰るところがないんです。親を泣かせ、兄弟を泣かせて出てきているんだから。金はないわ、やることはこれ一つとなったら、本当にやってしまう恐れがあります。それが私の思いだったのです。その時私の腹は決まりました。これほど狂っているのなら、一人がつっ走らないうちに、この人を盲目にしてしまおう。盲目にして生命さえあれば、杖がいる。その杖に私がなろう……と。

そのために私はどんな仕打ちを受けるかもしれんが、あえて甘受しよう。この人を盲目にしてみんなを救う以外に方法はありえないと決心しました。

一旦そう決めたら、もう後はどうしてやるかということしかありません。どうして先生を盲目にするかです。すると目についたのが、山岸先生の寝ている傍にある大きな火鉢です。火鉢にはゴンゴン火がおこっていて、その上にヤカンの湯が沸騰している。そのヤカンを大きなヤカンと掛け変えました。普通だったらとても私がよう持てんような大きなヤカンです。その煮えたぎった湯をかけようと思ったんですが、それでもかけたくないのが本心ですから、何とか翻意を促したいのですが、それがだめなんですね。何かいうと、「実行あるのみ！　即実行！」です。

湯は何回も沸騰しました。いよいよの時に、「もう仕方がない、支度はできたか」といわれて、「まだです」というと「もう待てん、このままでいいから行け、このままで行くぞ」と立ち上がりかけた。その時「待って下さい」といって起き上がるのを止めました。そしてヤカンのふたを取ると、靴のまま仰向けになって寝ている先生のところへ持っていって、頭の上に、ザーッとぶっかけました。

その時はまったく手が震えませんでしたね。自分でも驚くほどです。三分の二ほどかけたところでまだ湯が残っていたので、それをもう一ひねりして全部、空になるまで顔にかけてしまいました。

その二回目にかけた時、先生はのどをいためたらしく、「やったなあ！」と低い声でしぼるようにいいました。その瞬間、私は丹前着たまま、あの高いところを一飛びに、二間ぐらい飛んで、外に出ました。「やったなあ」という声に、ショックを受けたんです。戸は開けてありました。火がゴンゴンおこって室の中は暑いほどでしたから……。

それからというものは、今度は私が発狂状態ですね。私が逃げると、先生は追いかけてきました。ところが三叉路へ出て私はぶっ倒れた。傍にはケンという私が飼ってた犬がついてきていました。ふっと後ろを振り返ると、先生の顔が真っ白になって、いつもの倍ぐらいにふくれ上がっているようにみえるんです。多分熱湯で顔の表皮がはがれて、下に垂れ上がっていたんでしょうね。その時は無我夢中で、顔は目も鼻もないように見えました。

「ケン、行け！」

私は犬をけしかけた。その犬は、私を守るのには、生命がけで相手に嚙みついてゆくような犬でしたが、私が懸命に逃げているというのに、私の顔を見てクンクン悲しげに鳴いているだけなんです。仕方がないので、起き上がると今度は私は畠の方に向って逃げました。

走っていると、丹前が足にまつわりついて足がもつれます。それで丹前を脱ぎ、着物も邪魔でそれも脱ぎ、しまいにはお腰と襦袢だけになって走ってました。どこが畦やら何やら、皆目わからんです。全然土というものが見えないんですから。ここが畦だと思ったら溝だったり、こけつまろびつというのは本当にあのことですね。体中もう泥んこだらけになって逃げてました。

結局、私が走りながら思っていたことは、高圧線の鉄塔に昇ることでした。高圧線の鉄塔に昇って感電死するか、墜落死するか、それで鉄塔ばかり探していました。

ところがあいにくと鉄塔がないんです。そこへ大島さんが自転車に乗ってやってきたんですが、それが先生の姿に見えて仕様がない。傍で、一緒についてきた産田さんが、「あれは先生じゃないですよ。大島さんだから心配ないですよ」といってくれるんですが山岸先生に見えてならん。そこでそこらに鉄塔は見当たらんし、ちょうど有刺鉄線の杭があったので、それを引き抜いて、そのとがった方をノドにあてがったまま走ってました。先生が来たらその杭で一思いにノドを突き刺そうと思いましてね。有刺鉄線の杭はどうやって抜いたんですか、自分でも覚えがありません。杭の頭には、ひきちぎった有刺鉄線の切れっぱしがぶらぶらからんでいました。

ええ、着物ですか？　着物は産田さんのズボンとジャンパーを借りて着ていたんですが、追ってきた人と打ち合わせして、衣類を持って西ヶ峰で落ち合うことにしていたんです。ところが衣類が来るまでよう待っていられなくて、附近の民家の新しい家の二階借りて、足袋はだしのまま上がって隠れてました。だけど、その家の二階に上がっても、まだ安心できない。いつ私を捕まえにくるか、捕まえに来たら二階の窓から飛び降りてやろうと、やはり杭をノドにあてがったままでいました。その後この家を出て、付近の駐在所に飛び込んで保護されたんですが、何のことはない、その時分には先生は病院に入っていて、自分の火傷のことより私がどうしているか、心配ばかりしていたんです。

そこへ私の衣類が届いたんですけど、腰紐やら何やら足りないので、駐在の奥さんのを借りて着替えたんですが、周りのものがすぐに病院の先生を見舞いに行けというんです。行けるはずがありませんよ。少し気持ちが収まってくると、中林さんの宅へ行って、それから初めてワーッと泣きました。

その私を中林さんの奥さんが抱きしめてくれて、「大変なことでしたネ」といってくれました。

病院？　山岸先生の容態ですか？　その後行きましたよ。そしたら先生、病院のベッドで月光仮面みたいになって、顔から手から至るところ包帯してました。眼のところだけが、まつげのとこがちょこっと開いているだけ。眼もはれているから。私が行くとその眼を少し開けて、

「ニワ子、きてくれたか、よくやったぞ、よくやったぞ。さすがぼくの家内だ。さすが山岸の妻だ。立派だぞ」

これが先生の第一声でした。

そこへ中林さんも見舞いにきて、「大変なことでしたね」というと、当人は、「今にわかります、今にわかります。これは大変なことですよ。私心の一片だにない、全人を思う心の、全人愛からの見事な実行力です。見事でしたよ。今にわかってもらえます」と力を入れていっていた。その言葉を聞いてみんな唖然となっていました。中林さんは、「山岸さんという人は全然わからない人だ。あんだけ奥さんに熱湯をかぶせられて、どういう意味なのか、さっぱりわからん……」といって不審がっていました。しかしその次に、みんなのいる前で、「本当にあんたは立派だったね。よくやったね。自分を投げ出さなければやれないことでしたよ。だがね、だがね、それが〝我〟なんだよ」

そういいました。

私はその時、みんなのためにやった、それはわかった。だけど、「それが〝我〟なんだよ」というのはわからなかったし、気に入りませんでした。それまでものべつまくなしに、〝我、我〟とノイローゼになるほど聞かされてきましたからね、この期に至って、まだ〝我〟とはどういうことなんだろうと思ったんです。Y子に対する敵愾心などというものも、毛頭私にはありませんでしたし……。

幸いにして先生の眼は、つぶれなかったばかりか、顔の火傷の跡も残らなくて、かえって卵のむき味みたいにきれいに治って、元の通りになりました。ただ左耳がやられたのと、首に白い輪が残った。耳のことは顔の向きを変えながらひとのいうことを聞いていたので、私が察知したんです。本人は私が胸を痛めると思うから、一言もそのことはいいませんでした。私がわざと左耳の方で小さく話してみると、聞こえない。それで私が「耳が聞こえないんじゃないですか」というと、本人は首を振って、「聞こえるよ、そんなこと心配しなくていいよ」といってました。

首の筋はネクタイをしめていたので、白ナマズみたいな斑点が残ったんです。これは隠しようがないので、事情を聞く人に「首輪ですよ、奥さんに首輪をかけられているんですからね、どこにも逃げようないんですよ」と、ユーモラスに語って苦笑いしてました。

だけどそのことで、私は、先生を大変な目にあわせたという気持ちは爪の先ほどもありませんでしたね、ずっと長い間。むしろ人間追いつめられたらそうなりますよという、それしかなかった。しかし、病院へ看病に通っている時に、一度、私をここまで追いつめたことの復讐を必ずしてみせる、これ以上のことをしてみせると三、四十分くらい思いつめたことがありました。それが一昼夜も思いつづけていたような感じです。その時にハッと気がついて、何という恐ろしいことを考えるものかと自分自身にビックリして、身震いしました。そしてまた、ここまで考えさせる山岸先生がまた憎くなりました。

人を恨まば穴二つ、恨まれる身になっても、恨む身になるなということを母に聞かされてきましたが、これだなと思いました。

ところがそんなふうな私に、先生は無理にも看病させようとするんです。包帯をとろうとすると、

痛がってしようがない。気の毒やけど家内にしてくれというんです。薬を塗るのも、家内に塗らしてくれと。そんなことをいわれて、火傷負わせた張本人の私が嬉しいわけがありません。包帯をとったり、薬を塗ったり、まるで生き地獄でした。

そこへもってきて、またしてY子のことです。病院の医者が「奥さん、お願いします」というし、周囲のものも奥さん、奥さんと私のことをいうので、Y子は傍にいても面白くなく、飛び出すんです。「私なんか、蔭の女なんやから」といいながら。それをまたお守役の方が追いかける。私は病院に来ても、先生とY子の両方のご機嫌をとらねばならないので参ってしまい、一層気が狂った方が楽だと思って、病院で気が狂った真似をしたら、さすがに先生も困って、私を山に返してくれました。